

ふりかけ見れば

(567)

安部龍太郎 西のぼる画

「これが三国時代の書物か」

今上(光仁天皇)は六十三歳になられる。昨年即位が決まった時には、ご高齢を危ぶむ声もあつたが、先帝と真備は朝家の安定のために後継者と定めたのだった。

「わが国のこと記されているのは、第三十八巻だけでござります。他の巻は安禄山の乱の混乱の中で失われました」

「さようか。朝家と日本國のために身命を賭して働いた者たち。中でも吉備右大臣と阿倍仲麻呂には感謝と敬意を表する」

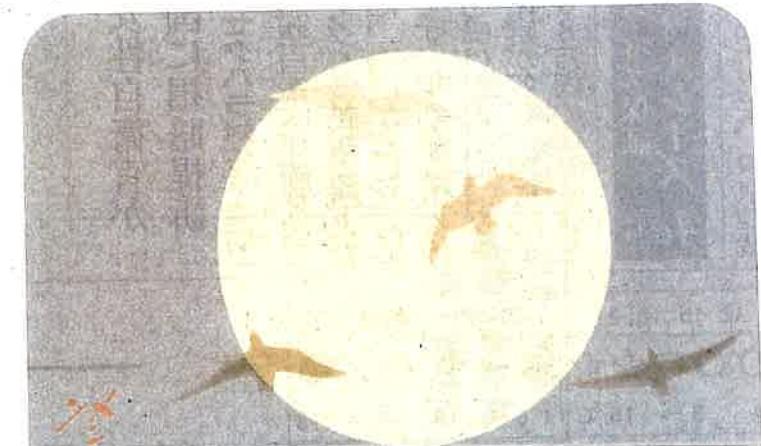
「有難きお言葉、皆と共に深く感謝申し上げます。お言葉に甘えて、ひとつお願ひがございます」

「申すがよい」

「わが国との交易を望んでいる唐の商人がおりまので、長門と筑前での交易と居住をお許しいただきどうございます」

「右大臣が見込んだ者なら間違はあるまい。そのように計らつがよい」

今上の許しを得て、真備はさっそく担当の役所に手続きを命じた。これは春燕の父石皓然が、昔から望んでいたことでもあった。



この仕事を最後に真備は右大臣を辞、吉備で隠棲することにした。時に七十一

したのはそれから四年後である。

生まれ在所の箭田(岡山県倉敷市墓
齢の身を養う静かな生活で、気が向い
田川ぞいの大きな岩に座つて琴を弾い
との山と眼下を流れる清流をながめな
の一生に思いを馳せていたのである。
真備町ではこの故実にちなみ、毎年
の頃に「吉備真備公弾琴祭」がもよおさ
真備が琴を弾いていた岩は琴弾き岩
れ、祭の日には郷土の偉人を偲んで琴
こなわれる。

真備が光仁天皇に献上した『魏略第
が、その後どうなったのか分からない
には楊貴妃に対する信仰が長く受け継
で、皇室の菩提寺である京都の泉涌寺
貴妃觀音がまつられている。
その理由が奈辺にあるか、史書はつ
していない。